

2 セット球育成のポイント

直径 2.5 ~ 3 cm に揃えるのが大切。

① 苗床づくりが第一歩

3月中下旬の播種となるので、中間地ではハウス育苗が望ましいでしょう。露地で育苗を行う場合はトンネルを準備しておき、発芽するまで地温の確保に努めます。暖地は露地でも育苗可能です。

よいセット球を作るには、秋まきの育苗の際と同様に完熟堆肥を投入するなどして、肥沃で排水の良好な苗床づくりを行うことです。また、春の上昇気温下での育苗なので、肥料を入れすぎると徒長しやすくなります。葉が倒れるとセット球の充実が不足するため、秋の育苗よりも肥料の量は控えめとします。

本圖 1 反 (10 a) 分の栽培なら、畝幅 130 cm ほどの畝を 40 m 分用意します。

② まきかたのコツ

セット球は、できるだけ同じ大きさに仕上がるようにしたいものです。バラまきより条まきの方が播種密度が揃い、ねらったサイズで仕上げやすいのでおすすめです。条間 8 cm で短冊状に溝をつけ、株間 1 cm になるようにまきます。セット球を掘り上げるころには、2 ~ 3 条に球が並ぶように仕上がります。

③ 播種後の管理

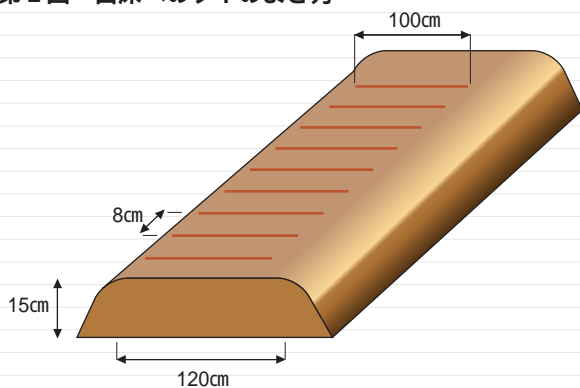
まき終わったら腐熟した堆肥などで覆土し、十分に灌水してやります。その後は苗床を乾燥させないように、灌水管理を行います。本葉 1 枚目が伸びたころ、厚まきになった所は間引きます。乾燥させると玉太りが悪く、小玉で終わる場合があるので注意しましょう。4月中旬以降は、可能ならハウスの屋根は降ろし、畝の芯まで十分雨水が入るようにします。

④ 掘り上げのタイミング

5月中下旬になると葉が倒伏してくるので、セット球を掘り上げます。夏の定植時は直径 2 ~ 2.5 cm で植え付けるのが最適ですが、収穫して乾燥させると一回り小さくなるので、掘り上げるサイズは 2.5 ~ 3 cm がよいでしょう。セット球が大きすぎると定植後に分球が増え、逆に小さすぎると貯蔵の際に歩どまりが落ち、また、収量を確保できないことがあります。肥大の程度にバラつきがあるようなら、大きさを揃え 2 ~ 3 回に分けて掘り上げるとよいでしょう。

掘り上げ後は 2 ~ 3 日地干しして 30 ~ 40 球ずつ束ね、夏場は風通しのよい場所で貯蔵します。

第 2 図 苗床へのタネのまき方



1 cm 株間で播種すると、球が 2 条にひしめき合うように肥大してくる。



風通しのよい軒下で、葉を束ねてはげ掛けのようにする。葉を落とし、棚に厚くならないように広げて貯蔵してもよい。

3 圃場でのポイント

適期定植と、適切な温度・水分管理を心掛ける。

① 植え付けのタイミングと植え方

セット球の植え付けは、8月30日を中心としてその後3～4日が適期となります。定植が早すぎると葉数分化4～5枚程度で結球を開始するため、小玉で終わりやすくなります。逆に、定植が9月中旬を過ぎるようでは結球のための日長・温度が足りず、青立ちの不結球が多くなります。

本圃は低温期の球肥大を助けるため、マルチ栽培がよいでしょう。条間20～25cm、株間10cmの4条栽培とします。深さは、セット球の首が見えるくらいの浅植えの方が、より萌芽が揃います。

② 萌芽を揃えるには

定植後は1週間で萌芽を揃えることが目標です。9～10月に十分生育を進め、葉枚数を確保することが、本圃の栽培では最大のポイントになります。

定植前の冷温処理

8月末は、まだセット球の休眠が完全に覚めていない状況にあります。そこで、定植の半月ほど前に10℃くらいで冷温処理を行うと、セット球は秋の訪れを感じて休眠から覚め、内部から芽が育ってきます。定植後の萌芽が早まり、また、揃いもよくなる効果が表れます。

地温を下げ、十分な灌水を

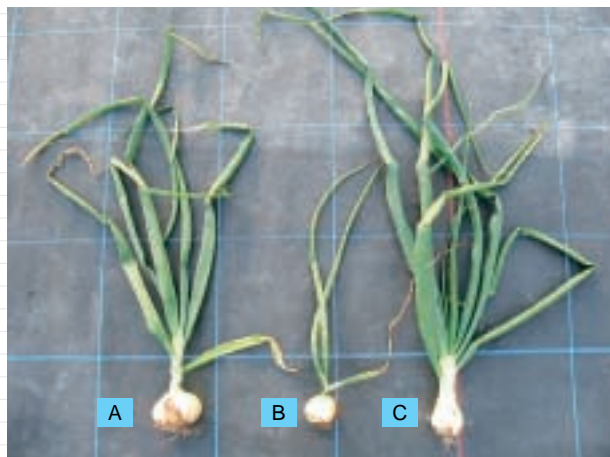
残暑の厳しい時期にマルチ栽培を行うので、速やかに発根させる工夫をします。整地の際は十分に水分を含んだ状態で畝立てを行い、マルチがけします。乾燥しやすい時期なので、チューブなどで灌水し、適湿状態にしてから整地するとよいでしょう。定植後もマルチの中が乾かないよう、灌水を行います。

また、地温が高すぎると、萌芽が遅れたり不揃いになったりします。9月初旬になっても暑さが厳しい場合は、かんれいしや寒冷紗のトンネルで遮光をするとよいでしょう。なお、マルチも黒マルチより白黒パンダマルチを利用した方が、地温を下げる効果が大きく発根の促進につながります。

「シャルム」の処理区別の萌芽調査 (滋賀県タキイ研究農場)

		萌芽率(%)		
		5日目	7日目	10日目
黒マルチ	常温処理	7	50	83
	冷温処理	79	96	100
白マルチ	常温処理	46	88	100
	冷温処理	79	96	100

冷温処理は8/10より、10月の冷蔵庫で貯蔵した。



A. 適期定植。10月中旬までに葉7枚を確保し、球肥大に移る。
B. 早植えすると葉4～5枚程度で日長感応し、小玉で終わる。
C. 萌芽が遅れると日長感応できず、青立ちになる。青立ち株は葉つきタマネギとして出荷してもよい。



黒マルチでの栽培。



白黒パンダマルチでの栽培。パンダマルチは二層構造で表面が白、内部が黒色。

3 圃場でのポイント

③ 多肥と遅効きは失敗のもと

初期に生育を進めることは大事ですが、チッソ成分を過剰に投入すれば過繁茂となり、軟腐病^{なんぶ}などを引き起こします。元肥のチッソ量は反当たり15kg程度とし、9月下旬に1回の追肥を行います。チッソの遅効きは球の肥大を遅らせ、青立ちを増やすことになるので、追肥の時期が遅くならないようにしましょう。

④ 芽かきのやり方

植えたセット球が大きい場合は、球の中で生長点が分裂しやすくなり、分球してしまうことになります。このような場合は、植えてから1カ月後くらいの時期に芽かきを行えば、正常な球で収穫することができます。大きい方の株の根が傷まないよう、貧弱な方の株を茎盤の部分で割るように裂いてやれば、簡単にとり去れます。残した方の株には、軽く土を寄せておきましょう。

4 収穫、出荷のポイント

葉つき出荷で新鮮さをアピール。

① 年内どりのコツ

10月上旬に葉が6～7枚程度確保できたら、10月中旬には肥大を開始します。この時、マルチの中が乾いているようでは小玉で終わってしまうので、マルチの条間に穴をあけ、しっかり雨水が入るようにしてやります。

寒い地域では、11月中下旬に霜よけのトンネルで保温してやり、肥大を助けて収穫率を高めるとよいでしょう。

② 収穫と出荷

収穫は、倒伏したのから2～3回に分けて行うとよ

いでしょう。収穫直後は日当たりのよい軒下に置き、乾かしてやります。葉を落とし、凍らないように貯蔵すれば、収穫後1カ月は切り球として出荷できます。

より新玉としてアピールするのなら、葉つきタマネギで出荷するとよいでしょう。萌芽遅れで青立ち傾向になった場合も、少し基部が太ったものから葉タマネギで出荷すると、出荷率が高くなります。また、葉が傷まないうちに出荷すれば、葉も球もすき焼きなどでおいしく食べられます。



葉つきで出荷される「シャルム」。



セットタマネギとして栽培した「シャルム」。